



Ludwig van Beethoven: Complete Works for Cello and Piano

aud 23.440

EAN: 4022143234407



Record Geijutsu (2018.11.01)

Ja, die Rezension siehe PDF!



大木正純 ● Masazumi Oki

1969年ストラスブル生まれで、一時イザイ四重奏団の一員を務めたこともあるチェリスト、マルク・コペーと1977年サンクト・ペテルブルク生まれのピアニスト、ピョートル・ラウルによる、ベートーヴェンのチェロとピアノのための作品全集2枚組。音源はライヴで、演奏は2016年11月3日に、1日で行なわれた由。演奏時間1トータルで正味145分、というところと驚く数字ではないかもしれないが、ベートーヴェンのソナタ5曲、さらに変奏曲3曲も含めて一気に、というのは、やはり並大抵のことでない。おそらく実際のコンサート通りの順番と思われるが、ディスク1に作曲家20歳の4曲、ディスク2に30歳代以降の4曲が整然と並んでいるのは、聴く側にとっても都合が良い。

コペーとラウルのデュオは、ひとときわノリの良いピアノに対して、チェロはそれを横目で(?)みつづ距離を計り、伸びやかに、あるいは機敏に動きながらも、この楽器らしい格調を確保する独特の呼吸に特徴がある。共演歴はもう長いというから、この調子でうまくやってきたのだろう。ただピアノのあまりの足取りの軽さゆえに、第3番のような曲がやや物足りなく感じられる危険性が生じる。良いのはむしろ後期の2曲で、第4番の淡く繊細な味わい、第5番の堅固な古典性がびたり決まっている。一方初期の2曲には、若々しさと、力余つての硬さという二面性あり。

蜂尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】データを見るとCD2枚分にもなる作品を1日で演奏し、しかもライヴで録ったようである。かなりの大仕事だ。さらに会場の表記も“小ホール”となっており、実際その音も相当なクローズ・アップである。それもよいのだがピアノがより大きく近く聞こえるのはどうも疑問だ。曲はやはりチェロ中心で作曲されているのでなおさらである。ちょっと無理の多いライヴである。(88)



■ベートーヴェン/チェロとピアノのための作品全集

①チェロ・ソナタ第1番②《マカベウスのユダ》の主題による12の変奏曲③チェロ・ソナタ第2番④《魔笛》の主題による12の変奏曲⑤チェロ・ソナタ第3番⑥《魔笛》の主題による7つの変奏曲⑦チェロ・ソナタ第4番⑧同第5番
マルク・コペー(vc)ピョートル・ラウル(p)
[アウディーテ@KKC5889(2枚組)]
¥4200

中村孝義 ● Takayoshi Nakamura

近年ではベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲やバッハの《無伴奏チェロ組曲》を1日でやってみようことも決して珍しくはないが、ベートーヴェンの場合、変奏曲まで含めるとなると演奏時間が長くなるのでこれまでそうした機会に出会ったことはない。このアルバムは、フランスのチェリスト、コペーとロシアのピアニスト、ラウルがサンクト・ペテルブルクで行なった全曲演奏会のライヴ録音である。1日で行ったライヴにしては、両者ともに驚くほど完璧らしい瑕疵がなく、どの曲を聴いてもいかにもライヴならではの熱気が随所に溢れており聴き応えは確かに大きい。演奏時点で47歳だったコペーと39歳のラウルと、まさに演奏家としても油の乗り切った状態であることが、曲の核心へと鋭く切れ込んでいく一瞬の弛緩もない張り切った表情から十分に窺える。ライナー・ノーツによれば、この時点までに彼はすでに、このベートーヴェンのソナタで20年にもわたる共演経験を重ねてきているとのことだが、確かに互いにこの部分では相手がどうしてくるかということに完全に熟知したように呼吸がぴったりと合っているのは、その長い経験が生きているからに違いない。全体に非常に水準の高い好みがちで、特にラウルはややけたたましく感じるところがなくもない。時にはもう少し抑え気味にして陰影に富んだ深みある表現も欲しい。